

初等部「学びの発表会 2019」の果実と種、そして、明日の発芽に期待する

最高学部 成田喜一郎(越境する教育学)

はじめにどんな〈問い〉があったのでしょうか

2019年度 自由学園初等部「学びの発表会」によせて

2017年11月、わたしは、自由学園初等部のすばらしい「土と育つ子どもたち」の発表とてんじの「よさ」が強くいんしょうにのこっています。そのよさとは、「土」や「畑」というおなじテーマで子どもたちがべんきょうしえんじたすがたが、「見ている人」にとってとてもよくわかり楽しく見えたところにありました。

いま、自由学園ではこれまで使われてきた「勉強」や「報告会」ということばから「学び」や「発表会」へとかわってきています。なぜ、どのようにかわってきているのか、今年、2019年12月の初等部の「学びの発表会」を見るのがとても楽しみです。

それは、いままでいじょうに子どもたちが「学び」のものがたりの「主人公」になろうとしているからではないでしょうか。また、先生方も「教える人」であるだけでなく、子どもたちから「学び」や「探求(たんきゅう)」を「よびおこしひき出す人」になろうとしているからではないかと思います。

わたしたち見る人も「収穫(しゅうかく)」されたものや子どもたちができたことだけを「見て楽しむ人」になるだけではなく、子どもたちがどんな「学び」や「探求(たんきゅう)」の道を歩んでいるのか、「想像力(そうぞうりょく)」と子どもたちとの「対話(たいわ)」を通して、みずからの「学び」を「問いなおし見とおす人」になることができるのではないのでしょうか。

自由学園の子どもたちと先生方といっしょに「学び」歩き続けている人
なりた きいちろう(副学園長 成田喜一郎)

この文章は、2019年12月7日当日に配布された「学びの発表会」パンフレットに書かせていただいたものです。お子さんと保護者が一緒に読めるように、ひらがなやふりがなの多い文章に「翻訳(Translation)」しながら、書いてみました。

果たして、実際、子どもたちの学びはどうだったのでしょうか。それは、具体的に各学年の先生方のご報告を読んでみましょう。

わたくしは、ここで、空から鳥の眼で〈俯瞰〉したり、川の流れてに沿って魚の眼で〈俯瞰〉したりしてみたいと思います。

どんな「果実(fruit)」が収穫できたのか

先生方の報告にもたくさんの「果実(fruit)」があったと思いますが、「越境する教育学」の視点から見ると、以下のように4つの「果実(fruit)」が収穫できたのではないかと思います。

(1) 先生が冒頭から単元を超える「本質的な問い」を設定する演繹的なアプローチか、単元の学びを進め最終段階で先生が本質的な問いを投げかける帰納的なアプローチかの方法が試みられました

が、何れにしても単元の学びを貫く「本質的な問い」を意識しながらカリキュラムがデザインされたことはとても意味ある試みになったことではないでしょうか。【貫く本質的な問い】

(2) 試みとして「学びの発表会」のゴールを見据えながら、カリキュラムデザインを記述言語化するシート（e-カリキュラムデザイン曼荼羅）の援用を試みたことではないでしょうか。

【カリキュラムデザインの記述言語化】

(3) 子どもたちが多様なリフレクション（問い直し/見直し；「表情イラスト」を含む）を体験し、その記述を通して、先生方は子どもたちの「声」を丁寧に聴き揃い上げて行かれたことではないでしょうか。

【問い直し/見直しで可視化された子どもたちの「声」への傾聴】

(4) 「学びの発表会」当日を終えて終わりではなく、他校の先生方とのリフレクション・ワークショップを実施したり、その前後に他の先進校の子どもたちの学びの発表会や大人たちの学びの発表会への積極的な参加と直後リフレクションを行ったり、自らの実践を丁寧に問い直し、その先を見通そうとしていたことではないでしょうか。

【他校の先生方と共に学びの拡張と深化をめざすリフレクション】

どんな種 (seeds) があったのか

すでに先生方のリフレクションでも様々な問い直しやその先の見直しは示されたと思いますが、「越境する教育学」の視点からは、3つの「種 (seeds)」が見えてきました。

(1) 今回の「学びの発表会」でも教科の学びの時間との横断をしながら実践した学年が複数ありましたが、「学びの発表会」の有無にかかわらず、普段から「間教科カリキュラム」（教科を横断するコンテンツだけではなく、教科を超えつなぐ「本質的な問い」や「学び方」の共有）のデザインに向かっていくと、さらなる高みに辿りつけるのではないのでしょうか。

【さらなる教科横断・縦断への踏み込み】

(2) これまでと異なる新しい試みをするとき、どうしても実践内容や方法に焦点化されがちですが、今後、子どもたち一人ひとりを大切にする学びの評価（アセスメント）の方法についても再検討していきたいですね。

【多様な評価（アセスメント）の方法への試み】

(3) また、初等部として子どもたちと先生方の新しい試みの「ねらい」や「経緯」「方法」「経過」など、より丁寧に保護者の方々にお伝えし、保護者に然るべき協力・協働を得られるようにしていきたいのではないのでしょうか。

【さらなる保護者との協力・協働】

これからどんな発芽が期待できるのでしょうか

最後に、収穫された4つの「果実 (fruit)」を踏まえ、3つの「種 (seeds)」の中にある可能性として、3つの芽ばえが期待できるのではないかと密かに思っています。

- (1) 子どもと先生の「学びの時間」実践研究会 (JUGYOKENKYU) の文化の「芽ばえ」
- (2) 子どもと先生のリフレクションをもとに「実践記録」を書く/作る文化の「芽ばえ」
- (3) 幼児生活団と中等科・高等科とを繋ぎ、継ぐ「探求的な学び」の文化の「芽ばえ」

以上、2018年4月から初等部の子どもたちと先生方の学びに並び進んできたわたくしの心と頭と身体に刻まれた「記憶 (memories)」の一部を書き連ね、「記録 (documentation)」とさせていただきます。これからも許される限り、様々な境界や限界を超えて、よくみ、よくきき、よくしつと、並び進む「越境する教育学」の“Translator”でありたいと思っています。